

兵庫県立川西明峰高校

E S Dを軸にした学校改革

ユネスコの精神にのっとり
学校改革により、生徒が
自分に誇りを持てる学校に

変革のステップ

背景と課題

- 高校入試における複数志願制の導入や学区拡大などにより、入学者の学力の幅が広がり、その影響で進学実績が伸び悩む。自己肯定感・有用感が低く、チャレンジする意欲を持ってない生徒が少なくなかった

実践内容

- **ユネスコスクールを目指す** 生徒の自己肯定感を高めるためにE S Dを軸にした学校改革を行い、学校の特色化を図った
- **すべての教育活動とSDGs (*1) の関連を整理** 全教科・科目のシラバスにSDGsの17分野との関連性を明記。各行事とのかかわりも明確にした
- **グローバルな取り組み** 持続可能な開発のための教育(E S D、*2)に基づいて改革。グローバル精神を涵養するとともに、ボランティアや地域連携を通して、ローカルへの視野を広げる

成果と展望

- 教師がE S Dの意義を理解し、改革を推進
- 地域の課題に関心を持ち、自信を持ってチャレンジできる生徒が増えた

個に応じた生徒指導に
力を入れる

兵庫県立川西明峰高校は、1学年の約半数が大学・短大に進学する学校だ。以前は、国公立大学や難関私立大学の合格者を数多く出していたが、県立高校入試における複数志願制の導入や学区拡大などにより、入学者の学力の幅が拡大。その影響で進学実績が伸び悩んだことを受け、生徒の変化に応じた学習指導や進路指導の確立が課題だった。

ただ、それ以上に教師が課題に感じていたのは、自己肯定感や自己有用感が低い生徒が少なくないことだった。教育情報部長の吉澤孝雄先生は、次のように語る。

PROFILE



自主・創造・礼節・友愛を理念とする。2017年度からユネスコスクール加盟に向けた改革に着手。「高校生心のサポートシステム研究開発校」「県立高校特色づくり推進事業」を推進中。野球部は甲子園出場経験もある強豪。

設立 1976(昭和51)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約280人

2019年度進路実績(現役のみ) 公立大は、都留文科大に1人が合格。私立大は、追手門学院大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南女子大、神戸学院大などに延べ122人が合格。短大、専門学校進学114人。就職16人。

住所 〒666-0006 兵庫県川西市萩原台西2-324

電話 072-757-8826

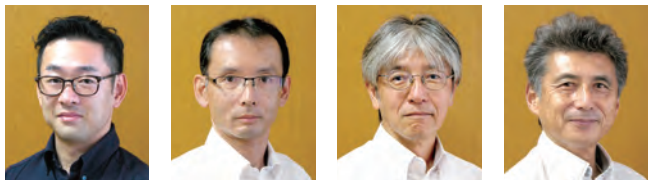
Web site <http://www.hyogo-c.ed.jp/~meiho-hs/>

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

*2 Education for Sustainable Development の略。「持続可能な開発のための教育」と訳される。環境、貧困、人権、平和、開発などの様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組んで問題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことにより、持続可能な社会の創造を目指す学習や活動のこと。

「本当に行きたい大学や専門学校があっても、楽に実現する進路を選択するなど、何をしようにも『自分には無理』と言って、チャレンジしない生徒が少なくありませんでした。生徒の自己肯定感を高め、夢や希望を持つて進路を実現する姿勢を養うとともに、生徒が自分に誇りを持てる学校を築くことが必要でした」

まずは、生徒との信頼関係の構築を第一に考えた。「明峰の生徒はこうあるべき」といった一律の理想像を押しつけるのではなく、生徒一人ひとりの個性や考え、特性を踏まえた「個に応じた指導」を、教師一人ひとりが意識して



中川透 なかがわ・とおる
校長
教職歴37年。同校に赴任して1年目。「生徒とともに自分も成長するべし。生徒を動かす、生徒の力を伸ばす。教育が平和を生む」

桜井英樹 さくらい・ひでき
キャリア推進部長
教職歴35年。母校に赴任して5年目。「生徒の夢に寄り添い、その実現のためにも歩む」

吉澤孝雄 よしざわ・たかお
主幹教諭、教育情報部長
教職歴28年。同校に赴任して3年目。「学びの楽しさを伝えるため、生徒とともに学び続ける教師でありたい」

松井健太郎 まつい・けんたろう
企画広報部GC・ASPNET(※3)委員長
教職歴7年。同校に赴任して3年目。「想像力と創造力を大切に。潜在的な『どうせ』という思い込みの壁をなくしたい」

生徒指導にあたった。

ただ、生徒が自分に誇りを持てる学校にする学校改革をしたいという教師の思いはあったが、生徒指導に時間を割く日々が続く、学校改革の足取りは重かった。

各教科・科目とSDGsの関係をシラバスに示し学ぶ意味を伝える

転機が訪れたのは、2017年4月のことだった。安岡久志前校長が赴任し、ユネスコスクールへの加盟を目指すことを宣言したのだ。ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示された理念を実現するために平和や国際連携を推進する学校のこと、持続可能な開発のための教育(ESD)を行う。安岡前校長から託された思いを、中川透校長は次のように語る。

「自分たちの学校は、ユネスコスクールだ」という自覚を持つことで得られる自己肯定感、地域や世界の問題解決に向けて活動することによる自己有用感、そして、自分たちにも地域や世界を変える何かができるという自己効力感を高めたいという思いから、加盟を目指しました。生徒同士、生徒と教師が対等に学び合いながら、世界や地域に目を向け、持続可能な未来を切

り開く意欲を育むことが、本校の目指す教育です」

17年8月、ユネスコスクール加盟の審査対象となるチャレンジスクールに認定され、学校改革が始まった。まず着手したのは、「総合的な学習の時間」や地域連携、国際理解教育など、今行っている教育活動をESDの観点から整理し、可視化することだった。それによって、取り組みの新たな価値を見だし、SDGsとも結びつけることで、教育の質の向上を図ろうと考えたのだ(図1)。

SDGsの理念を教育活動に落とし込む工夫の1つとして行ったのが、シラバスの改訂だ。



* 学校資料をそのまま掲載。

* 3 ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワークの略称。

各教科・科目で学ぶ内容が、SDGsのどの目標に関連しているかをシラバスに示したのである。例えば、「国語総合A」は「質の高い教育をみんなに」「ジェンダー平等を実現しよう」「人や国の不平等をなくそう」「平和と公正をすべての人に」に、「数学A」は「質の高い教育をみんなに」と「産業と技術革新の基盤をつくろう」に関連づけた。

「学習内容とSDGsの関連をシラバスに明記することで、教師はSDGsを意識して授業を行います。そうすることで、生徒は授業が世界を変えることにつながると意識でき、目的を持って学びに向かえると考えました」(中川校長)

体育大会や文化祭、進路講演会などの行事についても、一つひとつがSDGsのどの目標に関連するのか、準備の場面やプログラムを通して生徒に語りかけ、SDGsとの結びつきを意識して取り組めるようにした。

ユネスコの精神にのっとり、グローバルの問題に取り組む

具体的な取り組みは、ESDを象徴する「Think globally, act locally」の精神にのっとり、グローバルとローカルを両輪に進めている。地球規模の問題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことが、問題解決につながる新しい価値観や行動を生み出すという考え方だ。

そこで、生徒が身近なところから問題を考え

られるよう、地域と協働で行うのが「明峰の学び」だ。それは、14年度に「総合的な学習の時間」の一環として始まった地域人材による教養講座で、同校の教師、大学教授、NPO法人の方などを講師として、25講座を開講している(*4)。

対象は1・2年生で、クラス・学年を超えて希望の講座を1つ受講する。各講座は4回で構成。例えば、車いすの体験では、車いすに乗って校外に出て、自動販売機でジュースを買う。それだけの行為の中でも、生徒は「段差が怖かった」「小銭を入れる位置が高くて苦労した」といった感想を持ち、課題意識が生まれる。また、2〜3時間かけて学校に通学するというネパールの教育事情を知り、学ぶことの意味を自問する生徒もいる。1月には、それらの学びを基に、講座で学んだことや感じたことをレポートにまとめ、2月に発表会を行う。

生徒アンケートでは、9割以上が講座の内容に満足し、興味・関心が高まったと回答している。キャリア推進部長の桜井英樹先生は、同講座の成果を次のように語る。

「自分の知らない世界を見て、体験して、視野を広げることが、本講座のねらいです。最初は関心がなくても、面白かった、視野が広がったという生徒は少なくありません。関心のなかったことに魅力を見つけている経験が、様々なものに興味・関心を持つきっかけになると期待しています」

また、生徒の自己有用感を高めるために、地

域でのボランティア活動の機会も多く提供している。地域イベントへの参加、幼稚園児との風揚げ大会や絵本の読み聞かせ、小・中学校を訪れて行う学習支援などだ。それらのボランティア活動は希望制で、参加は生徒の自主性に任せているが、多くの生徒が参加している。

学校の特徴となるGC類型の改革

一連の取り組みの中で最大の改革は、GC(グローバル・キャリア)類型(*5)の見直しだ。GC類型は、国内外で活躍するグローバル人材の育成を目的に設置された類型で、海外の姉妹校とのオンラインによる交流、韓国語・インドネシア語による多言語教育などを行っている。同校の特色となる類型であり、ユネスコスクールを目指す上でも、GC類型の改革は急務だった。

18年度、GC類型の統括責任者に就任した企画広報部の松井健太郎先生は、次のように語る。

「GC類型のカリキュラムを見た時、3年間を通して育てたい生徒像が明確ではありませんでした。そのため、学年団や指導する教師によって指導にぶれが生じ、生徒も自分にとってどのような資質・能力が身につくのかという見通しが持てていないのだと思いました。生徒がGC類型に何を求めているのか、教師はどのような生徒を育てていくのかといった点を明確化する必要がありました」

松井先生が改革に向けて最初に行ったのは、

*4 2018年度は、保育、プログラミング、絵本、介護支援、手話、点字、車イス体験、災害・防災、子どもの貧困などのテーマで実施された。

*5 GC類型の募集人員は入学定員の10%で、小論文・面接・英語実技による特色選抜入試で選抜。2年生からは、複数志願選抜で入学した生徒たちも、GC類型に進むことができる。

生徒との面談だ。

「生徒不在の学校改革はあり得ません。常に生徒との対話を重視し、小さな声にも耳を傾けながら、生徒とのかかわりの中であらゆる教育活動を進めました。GC類型の改革についても、まずは生徒の声を反映させたいと考えました」（松井先生）

松井先生は、18年4月から1か月半にわたって、GC類型を選択した2年生約60人に面談を実施。GC類型を選択した理由を聞いたところ、「進学に有利だと聞いた」「英語が話せるようになりたい」など、様々な声が上がった。さらに、各学年団に対して、GC類型にふさわしい生徒像について調査。それらの結果を基にGC類型のアドミッション・ポリシー（AP。求める生徒像）を打ち出した（図2）。APは、特色選抜入試にも反映し、小論文には、主体性を発揮した経歴や入学後の抱負について尋ねる問いが設けられた。

図2 アドミッション・ポリシー

- 1 授業を中心としたあらゆる教育活動に主体的に取り組み、学校・学年の代表を担う生徒
- 2 国内外を問わず様々な人と連携・協働し、積極的にコミュニケーションを行う資質を有する生徒
- 3 人文・社会科学における基本的な理解を深め、論理的思考力を鍛えることによって、科学的に考察し、英語とICTを用いて表現する能力や態度を身につける意欲のある生徒

*学校資料を基に編集部で作成。

世界を身近に考えられるよう、生徒も教師も

海外との交流を充実させ、学びあいを行っている。例えば、18年6月にはインドネシアの生徒を、10月にはオーストラリアの姉妹校の生徒を招き、対面による交流を実現。19年3月には海外からの大学生と英語漬けの校内キャンプを3日間実施した。教師を、2年連続で韓国や中国のユネスコスクールに派遣。19年1月には、韓国のESDの関係教職員を受け入れた。

また、18年度からGC類型の2年次必修科目「GCI」で、探究学習を行うことにした。その研究成果は、18年度、大学主催のイベントや兵庫県教育委員会主催のフォーラムなどで発表し、同校として初めて、甲南大学の探究活動発表会で入賞を果たした。

「GC類型の取り組みで本校が目指しているのは、社会や人生に向かう態度の育成です。不確実性の高い社会において、自分で進むべき道を選び、自分の可能性を切り開く力をつけさせたいと考えています」（松井先生）

学校教育でESDに取り組む意義を見いだした教師たち

安岡前校長がユネスコスクールを目指すと言った当初、教師たちは戸惑ったという。中でも多かったのは、生徒指導が大変な状況で、新しいことに取り組む余裕はないといった声だった。しかし、研修やワークショップを重ね、ESDやSDGsの意義が浸透するにつれて、改

革に肯定的な声が聞こえるようになった。

「パートナーシップ、平和と公正、不平等の是正などを目指すユネスコの精神と、安全・安心な学校づくり、教師と生徒とのコミュニケーションや協働の大切さを追究してきた本校の教育活動が根底でつながっていると、研修などを通じて感じ取った先生方が多かったのではないだろうか。生徒指導を大切にす

る本校がユネスコスクールを目指すことに矛盾はないと、私たち教師が気づいたことが、改革を推進させる力になったのだと思います」（吉澤先生）

改革に自信が持てたことで、ICTの活用や探究学習の導入など、自ら授業改善に取り組む教師が増えた。生徒も視野が広がり、社会課題を身近に考え、ボランティア活動に参加している。探究学習の成果を生かしてAO入試で大学に合格する生徒も出るなど、生徒が自己肯定感を高める様子が少しずつ見えてきたという。

今後の課題は、校内にESDやSDGsの意義をさらに浸透させ、地域の拠点校としてユネスコの精神を普及していくことだ。

「ユネスコの理念を実現するためには、教育活動の成果を学校内にとどめるのではなく、校外に積極的に発信していく必要があります。教師・生徒が自分たちの言葉でESDの価値を発信できるよう、さらなる普及と教育環境の整備に努めていきたいと考えています」（松井先生）